

# 天草版平家物語における反語表現

—— 古典平家物語との比較を通じて ——

矢 島 正 浩

## 一 はじめに

中世末期の国語においては、係り結びが崩壊し、現代に通ずる新しい構文の型による表現が確立する時代である。疑問表現についていえば、中古以前は、疑問詞を持つ疑問文の場合、文中に係助詞ヤ・カ（一部ゾ）、あるいは文末にゾを用いる方法であり、疑問詞を持たない疑問文の場合は、文中・文末にヤ（一部カ）を用いる方法をとるものであった（以下、疑問詞を持つ形式を「内容的疑問文」、持たない形式を「肯否的疑問文」とする）。<sup>2)</sup>それが、この時期には、文中に係助詞ヤ・カが立つ構文形式が衰退し、原則として内容的疑問文では文末ゾ、肯否的疑問文では文末カを、それぞれ使用する形態に移り変わったのである。<sup>3)</sup>

ところで、疑問表現は、解答を要求する方法によって、三種類の類別が可能である。それぞれ、他者に解答を要求する「問い」、疑念が自分自身に向かい、推量文の一種ともいえる「疑

い」、話者自身で解答案を有する事柄について疑問文の形で提出する「反語」とされるものである。

文中に助詞が用いられなくなるといような推移は、この疑問表現の三種類を区別した場合、それぞれで同時に起こっているというわけではない。

例えば、長瀬（一九六七）や柳田（一九八五）によって、内容的疑問文を取る形式に着目した場合、中世後期という係り結びの衰退期において、文中に係助詞カを用いるという旧来の方法が、「問い」「疑い」よりも特に「反語」において多く用いられることが指摘されている。このことは、当時、内容的疑問文の「反語」においては、文中に係助詞を用いることに、何らかの意味があつたことを推定させるものである。ところが一方の肯否的疑問文の「反語」の場合は、同時期、助詞の使用については、「問い」「疑い」と区別されるような、特別な傾向を示さないとされており、内容的疑問文とは、事情が異なるのである。

中世後期の「反語」は、このように、旧来の表現と新しい表

現とが混在する。しかも疑問文の種類によって、事情が異なるなど、その在り方は、単純に捉えられない部分もあり、複雑である。

そこで、本稿では、資料に「天草版平家物語」を使用しつつ、中世後期の「反語」が、いかなる形式を、どのように使い分けていたのかということについて、内容的疑問文と肯否的疑問文とを区別して整理してみようと思う。また「天草版平家物語」は「平家物語」の口訳本とでもいうべきもので、同一素材を扱うものであることから、両資料を比較することにより、中世期における言語の移り変わりをかなり正確に観察することができると。この点を利用し、「天草版平家物語」に用いられる「反語」は、「平家物語」ではどのような表現が対応しているのかを調査し、そこにみられる推移の意味についても考察を試みたい（以下、資料はそれぞれ「天草版平家」「古典平家」と略記する。<sup>4)</sup>

## 二 形式別使用例数

本節では、天草版平家において、「反語」がどのような形式によって表されているか、また古典平家ではどのような表現が対応しているのかについて明らかにしておく。比較の意味で、「問い」「疑い」の表現例についても同様の観点から整理を行う。古典平家で対応する表現についての調査結果は、「反語」

についてのみ示す。

ところで、「反語」は、会話文・地の文・心語文・歌などでそれぞれ使用例があるが、あくまでも会話文での使用が中心である。<sup>5)</sup>また、特に歌などで使用される例には古い用法を残している部分もあるため、会話文のものと単純に一括して扱いにくい。そこで本稿では、会話文に現れた例のみに限定して取り扱うこととする。

また、疑問表現の形式を取るものの中には、不確定な要素を表す成分として、あるいは挿入句として、文の一部に組み込まれる形で現れる場合がある（例、〈光能↓文覚〉法皇も押し込められさせられてござれば、何とあらうか知らねども、うかがうてみる（一四六18・卷二9）。これらは本来の用法とは異なる部分が多く、また、特殊な形式上の傾向を持つ場合があり、<sup>6)</sup>区別して扱う必要がある。しかも、「反語」にはこれらの文中の使用例は極めてまれである（三例）。よって、以下、「問い」「疑い」「反語」とともに、単独で一文を構成するもののみを考察の対象とする。

### 二・一

最初に内容的疑問文について示す。（表中、及び以下の本文中で疑問詞をNとする。なお、例えば〈Nカ〜〉であれば、必ずNに直接力が続くということの意味せず、別の表現を挟む場合も含む。）

	問		疑		反語	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%
Nカ～。	5	2.7	10	19.2	17	17.9
Nカ～ゾ。	5	2.7	1	1.9	23	24.2
N～ゾ。	134	71.7	31	59.6	43	45.3
N～カ。	7	3.7	3	5.8	7	7.4
N～ゾヤ。	1	0.5	1	1.9	0	0
N～。	19	10.2	5	9.6	3	3.2
N。	16	8.6	1	1.9	0	0
Nゾ～ゾ。	0	0	0	0	2	2.1
計	187	—	52	—	95	—

表1 形式別用例数 (内容的疑問文)

まず、天草版平家での使用状況についてである(表1)。一見して、「反語」が、「問い」「疑い」と比べて、文中に係助詞カを持つ形式(Nカ～)、(Nカ～ゾ) (以下、併せて「文中カ」とすることがある)の使用例が占める割合が高い点を確認できる。特に「問い」と比べると、その相違は顕著であり、従来、指摘される通り、「反語」の一つの特徴として認めることができる。また、その裏返しとして、文末にゾを添える形式(N～ゾ) (以下「文末ゾ」とすることがある)の使用例数が、「問い」「疑い」に比べて少ない。ただ(Nカ～ゾ)が相当数あることを含めて考えると、特別「反語」において文末にゾを持つ形式が少ないというとはいえないようである。

次に、対応する古典平家での使用状況についてである(表

天草版平家	古典平家	Nカ～。	Nカ～ゾ。	Nカ～ゾヤ。	N～カ。	N～ヤ。	N～ゾヤ。	N～ゾ。	N～ゾヤ。	N～。	対応ナシ	計	%
	Nカ～。	16										1	17
Nカ～ゾ。	19		1							1	2	23	24.2
N～ゾ。	30	1					1	1	8	2	43	45.3	
N～カ。	4				2	1						7	7.4
N～。	2									1		3	3.2
Nゾ～ゾ。							2					2	2.1
計	71	1	1	2	1	2	1	1	10	5	95		
%	74.7	1.1	1.1	2.1	1.1	2.1	1.1	1.1	10.5	5.3			

表2 古典平家との対応形式別例数 (内容的疑問文・反語)

2)。古典平家の「反語」は、文中にカが立つ割合が圧倒的に高い。<sup>9)</sup>「反語」を表す他の形式では、疑問詞のみの形式(N～)にある程度まとまった例数がみられるのみで、それ以外の形式の例は非常に少ない。<sup>10)</sup>古典平家では「反語」は(Nカ～)をとるという形で概括してよさそうである。

なお、天草版平家での文中カの使用率より、古典平家でのそれが遥かに高いものである点は注意される。要するに古典平家

では、原則として内容的疑問文の「反語」は文中カで表しているものが、天草版平家では、それが崩れつつある段階にあるといえよう。

二・二

続いて、肯否的疑問文の場合である。

	問		疑		反 語	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%
～カ。	83	83.8	18	75	23	82.1
～カ～。	0	0	3	12.5	0	0
～ヤ～。	5	5.1	3	12.5	4	14.3
～ノ。	6	6.1	0	0	0	0
～ナウ。	2	2.0	0	0	0	0
～ナ。	3	3.0	0	0	0	0
～ゾ。	0	0	0	0	1	3.6
計	99	—	24	—	28	—

表3 形式別用例数（肯否的疑問文）

天草版平家の場合、「問い」「疑い」「反語」を問わず、約八割が文末にカを伴う形式（～カ。）（以下「文末カ」とする）である（表3）。肯否的疑問文では、一部の文中でヤ・カを立てる例を除くと、文末に助詞カを添える（「問い」のみは他の助詞を添える場合もある）という共通の形式上の特徴を持っているとみてよい。ここには、内容的疑問文で観察された傾向、す

天草版平家	古典平家						計	%
	～カ。	～カワ。	～ヤ。	～ヤ。	対応ナシ			
～カ。	4	2	9	3	5	23	82.1	
～ヤ～。			4			4	14.3	
～ゾ。					1	1	3.6	
計	4	2	13	3	6	28		
%	14.3	7.1	46.4	10.7	21.4			

表4 古典平家との対応形式別例数（肯否的疑問文・反語）

なわち「反語」は文中に係助詞を保持しやすいという傾向は、見出すことができない。つまり、肯否的疑問文では、助詞の使い方という点においては、「反語」は「問い」「疑い」とは区別されていなかったこととなる。

古典平家での「反語」の対応表現に注目してみる（表4）。天草版平家に比べ（～カ。）の使用の割合が少なく、逆に（～ヤ～）（以下「文中ヤ」とする）の割合が高い。表に示していないが、対応する古典平家で文中ヤを用いるのは、「問い」で一割強、「疑い」で約二割であり、「反語」での使用率の高さは歴然としている。

この結果から、肯否的疑問文の「反語」は、古典平家では文中に係助詞ヤを用いる傾向が強かったものが、天草版平家の段

階では、その傾向が失われたという推移で捉えることが可能である。

### 三 内容的疑問文の「反語」

#### 三・一

天草版平家は、その資料特性として、全巻を通じて均一な言語使用がなされるというわけではない。例えば、似通った複数の表現形式が用いられるような場合に、巻によって一方の表現に著しく偏って使用されることがある。どういふ事例において、どういった偏りを示すか、またその偏りをどのように解釈するかについては、既に多くの先学によって論じられるところである。<sup>12)</sup>

内容的疑問文の「反語」の諸形式についても、巻によって、若干、異なった使用状況をみせる。巻別使用例数を表の形にして、次に示す。(項目に立てるのは形式別用例数が十例以上あるものに限り、他は「その他」とする。)

巻別使用数に偏りがある場合に、清瀬(一九六八)において、巻の前半(最初から巻Ⅳの1章まで)と後半(巻Ⅳの2章から最後まで)とで大きく二分して捉える考え方が示されている。ここではその方法に沿って、使用数の偏りについて検討してみる。<sup>14)</sup>

「前半の巻での使用数」対「後半の巻での使用数」を表現形

	古典平家		天草版平家		Nカー。	Nゾ。	Nカーゾ。	その他	計	
	巻	章	巻	章						
覚一本	一		1~3						0	↑
	二	I	3~9		6	6	4	16		
	三		10~12		3	1	1	5		
	(一)		1		1	5	2	8		
百二十句	四	II	2~8		8		1	9	半	
	五		9~10	1	1			2		
	六		1					0		
竹柏	七	III	2~8		1		1	2	↓	
	八		9~13	1	2			3		
百二十句	九	IV	1					0	↑	
	十		2~10		9	4	1	14		
	十一		10~15	5	2	1	1	9		
	十二		16~20	6	2	3	1	12		
	計		21~28	3	4	6	2	15		
			計	17	43	23	12	95	↓	

表5 巻別用例数

式別に示すと、(Nカー)〇〇三対一四、(Nゾ)〇〇二六対一七、(Nカーゾ)〇〇九対一四である。天草版平家の前半対後半の頁数比は二二五対一八〇(約一対〇・八)であり、前半がやや長い。この点を勘案すると、(Nカー)〇〇が後半の巻に集中しているという傾向は、著しいものであり、注目すべきである。この点から、(Nカー)〇〇については、資料的な特質によってその使用には左右される余地があつて、天草版平家において、(Nゾ)〇〇類と、画然と区別される表現ではなかつた可能性を考え、<sup>15)</sup> おく必要がある。

また、それほど判然としたものではないが、(Nカーゾ)〇〇については後半に、(Nゾ)〇〇については前半に偏るといふ傾向

も、観察することができる。(Nカ)が後半の巻に集中することと合せ、文中に力を取る形式は後半の巻に偏り、文末ゾは前半の巻にやや多いという傾向を見出すことができる。

このことよって、例えば次のような例の解釈が可能となる。

① (仏↓祇王) 娑婆の栄華は夢の夢なれば、楽しみ栄えても  
なにせうぞ? 今この瀬に後生を願はいでは (二〇五八・  
卷二一) (↓楽しみ栄へて何かせむ 一〇五十三・卷一)

② (新中納言↓家長) 今は見べいほどのことは見果てつ、あ  
るとても何かせう」と仰せらるれば (三四七十四・卷四八)  
(↓有トテモ何かセシ 六六九七・卷十一)

右は、いずれも古典平家で「何かせむ」という表現が対応するもので、天草版平家の前半の巻では文末ゾで表し、後半の巻では文中カで表現するものである。いずれも話者自身の将来に絶望して、先行する仮定条件に示す内容のことが実現したとしても、何の甲斐もないという意を表す。このように、表現性の点で特に相違がないとみられる場合でも、それが使用される巻の所在によつて、このように二種類の表現形式の一方を用いたと考えられるのである。

### 三・二

右に示す巻別使用数の状況は、あくまでも概括的に捉えた傾向にすぎず、この観点からだけで、すべての例の使用形式について説明できるわけではない。ここでは、「反語」の取る形式

によつて、表現性の点で、やや異なる場合があることを述べる。前節で、内容的疑問文の「反語」では、文中力を取るものは後半の巻に多いことを指摘した。ここで、前半の巻にて使用されていた文中カの例に着目してみる。使用が避けられる箇所であえて用いられていることから、文中に力を残し得た条件が何であつたかが、明確に認められる例であると考えられる。

最初に(Nカ)の例から示す。

③ (清盛↓祇王) さては仏御前があまりつれづれげに見ゆる、  
なにか苦しからう? まづ今様を一つ歌えかし (二〇一一・  
卷二一) (↓対応セズ)

④ (緒方↓資盛) 取り込めまらせずとも、何ほどのことをか  
召されう、ただとうとう太宰の府へ帰らせられて、一所で  
ともかうもならせられい (二〇二五・卷三) (↓何程事  
カ為出スヘキ 卷八・9ウ)

該当する三例のうち、二例を示したが、残り一例は③と同内容の文である。この「何か苦しうござろう」の表現は、(Nカ)も含め、後半の巻の例も合せると、全部で九回使用されている(うち(Nカ)の形式例は三例)。文末ゾによる同表現の例が存在しないことから考えて、この表現は文中力を用いることが当時の慣用であつた可能性がある。

もう一つ考えておきたいことは、これらの反語文では、自らの確定的な判定を示すものであり、反語文が本質的に持つ問い掛けという意味合いが極めて薄い点である。「反語」では、以

下に続く命令文の前提となる素材が提供されているに過ぎず、受容者に対しての働きかけが積極的には認めにくいのである。表現を変えれば、前半の巻の〈Nカー〉は、話者の意識が、他者への働きかけよりも、認識対象である事柄へ向かうところに生じる表現であるということが出来る。

後半の巻の〈Nカー〉の例については、同様の性質が認められる一方で、更にもう一点、特性を加えることができる。文中で力を立てる形式は、新しい表現である文末ゾと平行して用いられる段階では、何らかの文語意識を伴うものであったことが当然予想される。後半の巻の例において、それが、たとえば改まった場面や上位者を聞き手とする場合に用いられるという傾向として現れてくるのである。

⑤ 〈尼公↓法皇〉捨身の行を修しさせられうずるには、何のおはばかりかござらう(三九七十一・巻四二七)〔↓何ノ御憚カ候へキ 七六三二〇・巻十二〕

⑥ 〈周囲の家臣↓丹後の侍従〉いかでかきさることのござらう(四〇六一八・巻四二八)〔↓争カ去事候へシ 七七五四・巻十二〕

一般に、上位者などを聞き手として、何らかの主張を行う場合には、直接的な意向を押しつけることは回避しようとするものである。〔反語〕の場合、それを文中カという形式によって行っていたことが考えられるのである。

〈Nカーゾ〉の場合は、基本的には〈Nカー〉と共通する

性質を兼ね備えている。

⑦ 〈成親↓ゆ〉今はさのみつれなう何事をか待たうぞ」と言うて(六一二・巻一八)〔↓何事をか期すべき 一八七四・巻二〕

⑧ 〈貞能↓清盛〉人も人にこそよれ、いかでかさやうの儀はござらうぞ?ここで仰せられたこともをも御後悔でござらうずれ(五〇一四・巻一六)〔↓争かさる御事候べき 一七六三・巻二〕

⑦は自分自身の身の振り方について述べる独話文である。他者への働きかけとは関わりなく用いられた例である。また、⑧は、他者への働きかけが認められる例であるが、聞き手が上位者であり、直接性が回避されるべき箇所である。

ただ、ゾを文末に添える分、〈Nカー〉に比べ、「反語」において主張しようとする姿勢が、より明確な場合が多いようである。次は、戦場で心構えのなっていない兄通盛に対し、怒りをもって諫める表現に「反語」を用いているものであり、聞き手は上位者ではあるが、働きかけはかなり直接的であることがみてとれる。

⑨ 〈能登殿↓通盛〉ましてさやうにうちとけさせられては何の詮にかたせられうぞ(二五八七・巻四六)〔↓何ノ詮ニカ立セ玉フヘキ 五一八八・巻九〕

その意味では、〈Nカーゾ〉は、〈Nカー〉と〈Nゾ〉との中間に位置する用法であったとみることができよう。

次に、〈Nソゾ〉の例についてである。〈Nカ〜〉とは対照的に、他者への働きかけが明瞭で、直接的な例が多い。

⑩ 〈頼朝↓文覚〉勅勘を許されいでは、何として謀反をも起こさうぞ」とあつたれば、「それはやすいことぞ」(一四五二〇・卷二九) (↓勅勘ヲ赦レスシテハ争カ謀反ヲハ發スヘキ 三四四六・卷五)

謀反を起こすことをそそのかす相手に対して、それはできないという判断を伝えるものである。「反語」自体が相手に伝達したい情報そのものであり、直接的な伝達態度が認められる。この「反語」は、「勅勘を許されずに、どうして謀反を起こすことができよう」と受容者に問い掛け、解答を委ねる形式を持つ。それによつて、受容者自身も「謀反を起こせるはずがない」という認識を導き出すことになり、直接的な表現性が生じるものである。

前節で、天草版平家の疑問表現のうち、内容的疑問文の場合には、「問い」や「疑い」では文末ゾを取る形式が基本であることを示した。「反語」がこれらと共通の形式を取る場合は、要するに、疑問表現の本質的な機能である問いかけの働きを、より強く必要としている場合ではなかつたかと考える。文末ゾの「反語」は、いずれも、一旦は「問い」であると理解されても、一向に差支えない文意を内包しているといえる。

このように、本来の問い掛けの機能を利用しながら、直接他者に働きかけていることが明らかな例が多い。ただし、次のよ

うに、他者との関わりのない部分でも用いることがある。後半の巻にも一部みられるが、前半では更に多い。

⑪ 〈少将↓ゆ〉書きおかれぬならばなんとしてこれをば見うぞ」というて康頼入道と二人読うでは泣き(七八三・卷一 11) (↓いかでかこれを見るべき 一二七13・卷二)

この種の例が存在することは、文末ゾに、先に示した文中カの特質と重なりあう部分があることを意味する。

とはいえ、直接的な意向の表現箇所では文中カが使用されることはなく、専ら文末ゾであつた。この点から、文中カから、文末ゾへ移り変わるに際して、より早く交替が推進されたのは、他者への働きかけが明瞭な部分からであつたのではないかということが考えられる。そして、漸次、「反語」表現全般に交替が及んでいったものと思われる。

このように、文中カと文末ゾは、表現性の点では、異なりをみせる部分と、等しく用いられる部分とがあつた。また、こういう段階であつたからこそ、前半の巻では文末ゾが用いられやすく、後半の巻では文中カが用いられやすいという、資料的な特性を反映する余地が生まれたのであろう。

#### 四 肯否的疑問文の「反語」

第二節で示したように、肯否的疑問文の「反語」の場合、文末に力を取る形式でほぼ統一されている。対応する古典平家で



は、文中にヤを用いる比率が「問い」「疑い」に比べてやや高く、その点で「反語」としての特徴を示すものであった。なぜ、古典平家で示しているような傾向が、天草版平家において消滅してしまふのか。本節では、その点について、天草版平家では、肯否的疑問文の「反語」が、どのような形式をとり、どのような理由でそれを用いているかを明らかにすることによって、考えていく。

#### 四・一

天草版平家の肯否的疑問文の「反語」は、そのほとんどが文末にカを用いる形式であり、肯否的疑問文ではこの形式が基本形式と位置付けられる<sup>(1)</sup>。その点では「問い」「疑い」と区別されるべき特徴はないのであるが、述語部分を中心とした構文形式に着目すると、「反語」は、いくつかの特徴的な形式を取ることがわかる。大きく分けると次の五種である。古典平家での状況も比較の意味で示しておく。(天草版平家の表現例(例数)↑古典平家の表現例(例数)↓の順で記す。φは該当例なしの意。(4)は「体言」を含むので、例数のみ示す。)

- (1) 「形式名詞十アリ(十推量ウ)十カ」型  
 【コトガアルカ/コトガラウカ(七例) ↓ φ】  
 (1) 「形式名詞十ヤ十アル(十推量ベキ)」型  
 【φ ↓ ↓ ヤウヤアル(ベキ) /モノヤアル(九例)】  
 (2) 「形式名詞十カ」型

- 【コトカ/モノカ(五例) ↓ ↓ コトカ(二例)】  
 (3) 「指定十否定十カ」型

- 【デハナイカ(三例) ↓ ↓ φ】  
 (3) 「指定十アリ十否定十ヤ」型

- 【φ ↓ ↓ ニアラズヤ(二例)】

- (4) 「推量十体言十カ(八)」型 【(二例) ↓ ↓ (二例)】  
 (5) 「推量十カ」型

- 【ウカ/マジイカ(六例) ↓ ↓ ベキカ/ベシヤ(四例)】

※天草版平家の例で、古典平家において対応を欠くものは五例である。

右の結果から、古典平家と天草版平家の「反語」の表現方法には、同質なものとして捉えられる部分と、変化した部分とがあることが観察される。

まず、古典平家・天草版平家ともに、形式名詞や推量表現を用いることが多い点で共通した傾向を示す。この点は、二資料間で変化していない部分であることから、中世後期における肯否的疑問文の「反語」表現において、重要な要素として機能していたことが考えられるのである。ただ、その一方で、細かくみると相違点も多く、形式名詞に交替がみられること(ヤウ↓モノ・コト)、また形式名詞の使用位置は文末で用いられるものが増加していること、推量の助動詞に交替がみられること(ベキ↓ウ)など、質的に変化している側面もあることをうか

がわせる。

また、古典平家に文中ヤが多いという傾向があるが、その形式の多くは、「ヤウヤアル」という特定の表現に集中している。このことから、古典平家の「反語」の一つの特性として示した文中のヤの用法も、既に係助詞としての自由な用法を失い、固定的な表現でのみ使用される衰退期にあつたとみることができさる。

#### 四・二

天草版平家には、右の諸形式のうち(5)を除き、「問い」「疑い」を表す例はほとんど存在しない。従つて、その意味では、右の諸形式は、「反語」であることと密接な関わりを持った形式といえる。以下、それぞれの形式を取ることに意味について、順を追つて説明する。

(1) 「形式名詞＋アリ（＋推量）＋カ」型

⑫（成親↓（不特定）たとひ重料をかうむつて遠国へ行くものとても、人一人身にそへぬ者がある（五三・一七）（↓人一人身にそへぬ者がある 一七九・四・卷二）

⑬（義経↓老翁）さては鹿の通はう所を馬の通らぬことがあらうか？汝やがてしるべせい（二六〇・二〇・卷四）（↓サテハ鹿ノ通ン所ヲ馬ノ通ンヤウヤ有ヘキ 五二・七・卷九）  
⑭では「人一人身に添えぬ」という非常識的な現実を、⑬では「鹿が行ける所を馬は行けない」という通常の理解に反する

認識を、それぞれ言語化して「こと」で一つの概念としてとりまとめをなし、その命題が成立するか否かを問い掛ける。普通では考えにくい現実や認識を、わざわざ命題に組み立ててその成立を問いかけるといふ方法によつて、必然的に話者の意図が「反語」としての解答案にあることが推定される。

古典平家では、正確な対応を欠く一例を除き、⑫の「ものやある」が一例、それ以外はすべて⑬のように「やうやある」が対応している。歴史的な推移としては、形式名詞では「様（やう）」から「こと」へ、助詞では文中ヤから文末カへとそれぞれ交替があつたことがわかる。

(2) 「形式名詞＋カ」型

⑭（不特定）↓茅野太郎）一条の次郎殿の手でばかり軍をすることか（二五〇・三・卷四）（↓一条ノ次郎殿ノ手ニテ計軍ヲハスルコトカ 五〇・一・卷九）

⑮（清盛↓取次）そのやうな遊び者は人の召しに従うてこそくるものなれ。さうなう推参することがあるものか？その上、祇王が（九五五・卷二）（↓さうなう推参するやうやある 九六・六・卷一）

⑭では「一条の次郎の軍勢だけで戦をする」という事態を「こと」で取り上げ、その命題が成立するものかどうかを問い掛け、⑮では「さうなう推参することがある」といふ命題が一般的に成立するものかどうかを問い掛ける。いずれも受容者の認識・行動において明らかに誤っている部分を表現化する。そ

れを「こと十か」述語文で概念化した事態に対する判定を要求し、「もの十か」述語文で発話関与者の個別的な見方を越えた、一般論としての判定を要求する。本来成立しない認識や行動を取り出しているため、必然的に「反語」としての表現性を生じうる。

古典平家で同様に形式名詞が述語を構成していたのは⑭の「こと」と他に、もう一例「もの」の例があり、他は⑮の「やうやある」が二例対応していた(他の二例は正確な対応せず)。古典平家では形式名詞が述語をなす形式が、天草版平家ほど一般化してはいなかったことと、形式名詞「やう」が文中で用いられていたのが、「こと」「もの」へと交替し、更に文末に移ったことが観察される。

(3) 「デ十否定十カ」型

⑯(重盛↓清盛) 田園ことごとく一家の進退となつた儀は、希代の朝恩ではござないか? (四六八・巻一六) (↓是希代の朝恩にあらずや 一七二四・巻二)

主題に呼応する述語という形で、否定語を用いて解答とは反対の内容の命題が成立するか否かを問う。(1)・(2)の「反語」が、否定すべき肯定事態がまずあって、それをそのまま概念化して問いかけて否定するという仕組みを持った表現であった。それに対して、これは、肯定すべき事態があつて、それを否定する形で問いかけて、命題が内容として成立しないことを導き出す仕組みを持つ。主張しようとする点が、命題の否定事態か

(1)・(2)肯定事態か(3)の違いがあるものの、基本的には同じ構造といえる。

また、あくまでも肯定命題が前提となつて否定命題が成立するものであることから、肯定命題による主張意図は明確である。従つて、この形式を取るものは、問いかけの意味より、確認の意味の方が強くなる場合がある。

古典平家では、対応を欠く一例を除くと、他はいずれも「にあらざや」の形式である。ここでは、否定表現アラズから(ゴザ)ナイへの交替と、助詞ヤからカへの交替が見られる。(4) (推量十体言十カ(ハ))型

⑰(敦盛↓熊谷) ただ今名のらねばとて隠れあらう者か? 首実検のときやすう知れうぞ (二七七二・巻四九) (↓只今名乗ネハトテ終隠レ有ヘキ物カハ 五四九二・巻九)

⑱(祇王↓母) たとひ命を召さるゝとも、惜しまうずる我身か? (九九一六・巻二一) (↓たとひ命を召さるゝとも、惜しかるべき又我身かは 一〇〇八・巻一)

体言は二例とも話者を指し、自らのことについて問う。他者に、話者自身の評価を問うような場合を除けば、一般には「問い」として成立しない特殊な内容といえる。そのため既に話者が解答を用意していることが明らかとなり、「反語」と解釈される。ただ、(1)・(3)が、「反語」であることと、それぞれの表現形式を取ることに、なんらかの関連性を見出すことが可能であつたのに対して、この場合は必ずしもそれが明確でない。

たまたま天草版平家には該当例がなかったが、体言が話者以外である場合など、「問い」「疑い」としての用法も普通にあり得る形式であったと考えられる。

(5)〔推量十カ〕型

以上の(1)～(4)は、天草版平家に限れば、「問い」「疑い」にはほとんど現れない形式である。それに対して、(5)の形式は「問い」「疑い」にも多数みられるものである。

そのうち、次の例のように、命題の否定事態が通常の認識として一般性を帯びており、形式名詞モノ・コトを用いなくとも、それらを用いた場合と同様の表現性を有する場合がある。

⑲ 〈重景↓三位中将〉 楽しみ栄え世にあるとも、千年の齡を延べうか？たとひ万年を保つとも、つひに終りがあるまじ

いか？(三二四22・巻四14)〔榮ミ栄へ世ニ有トモ千年ノ

齡ヲ延フヘキカ 六〇五11・巻十〕

命題は、命題の素材自体、そもそも成立しにくい内容(「生命を千年保ち続ける」)であり、それに推量の助動詞が下接している。そもそも命題が成立しにくい内容を、断定を保留した形で問いかけることにより、当然、それとは反する内容(「千年も生きられない、早晚人は死ぬものだ」)が導き出されることになる。

それ以外の例には、本来の問いかけの機能が認められる。それはこの形式が「問い」と同様の形式を持つことと関わっているように。

⑳ 〈宗盛↓虜囚〉 魂はみな東国にこそあらうづけ、ぬけがらばかり西国へ連れうか？とうとう下れ(一九〇9・巻二8)

(↓対応セズ)

虜囚が西国への同行を申し出たのに対して、答える場面である。その申し出を受け入れない趣旨を伝達するのに、話者の意見を一方的に通達するのではなく、その解答に至る経緯を、受容者も共にたどり、結果的にその解答を受容者自身も加わる形で得る方法である。形式名詞を用いる形式と異なり、あくまでも具体的・個別的な事情を対象とする点が特徴的である。

このように、この型を取る「反語」は、文脈に支えられるまでもなく「反語」であることが特定されるものと、本来の問いかけの機能に従いつつ「反語」の意味を導き出すものである。いわば、「反語」としか解釈され得ない命題のものと、「反語」以外に解釈されても支障がないものである。こういった例でつたため、(1)～(3)のように「反語」であることが特に形態的に現れるような方法を取ることがなかったとも考えられよう。

ちなみに古典平家では、対応していない一例を除くと、すべて述語は「ベキ十(カ・ヤ・ゆ)」の形式を有している。基本的には古典平家と天草版平家とで変化していないが、推量表現がベキからウへと交替している点が注目される。

## 五 まとめ及び今後の課題

以上、「反語」表現において、旧来の表現形式と新たな表現形式を混在させて用いる天草版平家を対象とし、「反語」表現の方法の実態を整理してきた。古典平家での対応表現との比較を通して得られた歴史的な推移という点についても合せてまとめた上で、その意味するところについて考えておきたい。

内容的疑問文によって「反語」を表す場合、多くは文末にゾを添える形式によつて表される。ただし、他者への働きかけがない、あるいは直接性が回避される部分、改まった意識がある部分では文中に力を立てる形式を用いることがあつた。その傾向は、天草版平家の後半の巻で特に著しかったといえる。

その意味では、文中に力を立てる形式は、自由に広く用いられていたわけではない。旧来の表現方法であるゆえに、文語的な表現性が感じられる形式になりつつあり、そのため使用される箇所が限定されていたということが考えられる。

一方、肯否的疑問文で、「反語」を表す場合は、「問い」「疑い」と同様に、文末に力を添える形式が基本である。ただ係助詞使用以外の点において、「問い」や「疑い」と区別する形式上の特徴があり、特に顕著なのは形式名詞を用いて、個別事態から一般事態に抽象化して命題とする捉え方によつて「反語」を表そうとしていたことである。同じ形式名詞を用いる場合でも、古典平家では「やう」が多用され、「こと」「もの」はほと

んど使用されていない。「やう」は、事態を様子・状況的な側面から把握しようとする方法であり、その意味で個別性・具体性を残すものといふことができよう。それに対して、天草版平家で多用されていた「こと」「もの」は、個々のできごと・認識等を一般化し、抽象化しようとするものである。近代語への移り変わりの中で、ものごとの捉え方の移り変わりの一面が、この「反語」表現の交替において、現れ出ているといえるかもしれない。

また、天草版平家と古典平家とを比較して、もつとも増加していた形式は、「形式名詞＋カ」である。現代語では、「なに、負けるものか」のように特殊なモダリティを帯び、一語化した終助詞のように振る舞う用法もあるなど、「反語」を表す形式の一つとして、広く定着している方法である。「反語」であることを、形式の点で明示するような新しい方法を獲得する動きとして注目すべきである。

ところで、古典平家で多用された文中ヤの用法は、実は既に活力を失い、衰退の兆しを見せるものであつた。そして、天草版平家では、基本的には文末カへの交替をほぼ完了している。天草版平家は、形式名詞、その他の方法によつて文末で一括して「反語」を表現する新しい方法が十分に一般化した段階にあつた。古代語的な表現法に則つた文中に係助詞を立てる方法は重要性を失い、他の疑問表現と同様に文末で力を用いるに至つていたのだと考えられる。

なお、一方の内容的疑問文においては、その述語形式において形式名詞を用いるなどの特別な傾向を示さない。<sup>20)</sup> 内容的疑問文では、疑問詞を用いることで、その疑問詞による不確定要素に何が該当するかを考える過程を含むことになり、形式名詞を用いて対象とする事態を一般化・抽象化するなどの過程は、肯否的疑問文の場合ほど必要とされなかったのかもしれない。また、別の見方をすれば、そういった形式名詞類の使用によって「反語」であることを形式上明示するような方法を持たなかったため、文中に力を立てることによって「反語」の意味であることが固定する必要があつて、内容的疑問文においてのみ、遅い段階まで係り結びの形式を保存していたという解釈も可能である。なおも、検討を要する部分である。

また、肯否的疑問文にのみ見られた、形式名詞などを用いる特有の形式は、今日では内容的疑問文においても用いることができる。更に、現代では、「反語」に限らず、「問い」「疑い」にも同様の形式を広く用いている。本稿で得られた結果は、天草版平家及び古典平家にのみ該当するものなのか、あるいは国語の推移を反映するものなのか、その位置付けが明確でない。他の資料を用いて、「反語」形式の推移を更に明確にする必要がある。いずれも課題としたい。

### (注)

- (1) 本稿では、不定称の代名詞・数詞・副詞・連体詞類が疑問文で使用される場合のものを、一般の呼称にならって「疑問詞」として扱う。
  - (2) 内容的疑問文、肯否的疑問文の表現は、阪倉(一九九三)に従うものである。他にも「説明要求・判定要求」の疑問文、「不定方式・特定方式」の疑問文等、様々な呼び方があるが、本稿は、ある種の解答を話者が用意する「反語」を扱うものであり、「内容的」「肯否的」の称が適切であると判断した。
  - (3) 以上の疑問表現の推移については、山口(一九九〇)、阪倉(一九九三)に詳しく論じられる。
  - (4) 天草版平家が原拠としていた古典平家については、清瀬(一九八二)で示された考え方に従い、以下のものを用いた。  
巻Ⅰ～Ⅱ・Ⅰ章：覚一本(龍谷大学本、日本古典文学大系「平家物語」を使用)  
巻Ⅱ・Ⅱ章～Ⅲ・Ⅷ章／巻Ⅳ・Ⅱ～ⅡⅧ章：百二十句本(斯道文庫本、『百二十句本平家物語』汲古書院)を使用)  
巻Ⅲ・Ⅸ章～Ⅳ・Ⅰ章：竹柏園本(天理図書館蔵)
- なお、本稿での例の引用は、天草版平家は歴史的仮名遣いに変更し、句読点を適宜施す。古典平家も、漢字を通行の表記に変えるなど、一部改めたところがある。所在は天草版平家の方は(頁・行・巻・章)の順で示し、対応する古典平家については(↓(対応する表現)それぞれのテキストの頁・行・巻)で示した。
- (5) 会話文に一二三例に対し、地の文一一例、心話文二例、歌四例で

ある。

- (6) 例えば挿入句を形成するものは、「(地) 基清といふ者なんとしたか、このことを聞いて」(四〇五・四・卷四二八)のように、句末に助詞カを伴う形式を用い、例外がないというはつきりとした傾向がある。

- (7) いずれも働きかけの意味を持たず、素材の一部として用いられている。

・(清盛↓貞能)「たとひ人なんと申すとも、七代まではこの一門をばいかでか思し召し捨てさせられうぞぢやに、成親といふ無用のいたづらもの」(四二一八・卷一六)

- (8) 表には示し得なかつたが、天草版平家の「反語」は、原則として述語に推量の助動詞ウ・ウズを伴うという特性がある。

・(頼朝↓大臣殿)清盛入道殿御許しなくは頼朝いかでか命生きて二十余年の春秋をば送りませうぞ? (三六一二〇・卷四二)

このように、推量表現を述語に持つ「反語」は、想定事態を話題の対象とし、ここでは、話者の内的な判定に由来する見解が述べられる。推量表現を必要としない、例えば「いつ私が嘘をついた?」のごとく事実を話題とするような「反語」が天草版平家では用いられていなかったということになる。

- (9) 「問い」「疑い」は、「反語」と比べ、古典平家で文中カが対応している比率は遥かに低く、「問い」で一割強(一八七例中二五例)、「疑い」で約二割(五二例中一一例)に過ぎない(ただし、地・心語文等、今回の考察の範囲外の例を含めると、比率は若干高くなる)。

- (10) 「反語」では、古典平家では文中カ以外では(〜)が一〇例

対応しているが、そのうち八例については、平仮名本系の百二十句本(京都府立資料館蔵 高橋貞一校訂『平家物語百二十句本』(思文閣)を使用)等の他本では文中カの形式が対応しており、確例は少ない。

- (11) 古典平家で文中カが対応する例数は、「問い」で九九例中一六例、「疑い」で二四例中五例である。なお「疑い」では、地・心語文等、今回の考察の範囲外の例を含めると、該当例数がかなり増える。

- (12) 清瀬(一九六八・七三・七八)、小池(一九七三・七六)、伊藤(一九七八)等で論じられる。筆者自身も矢島(一九九三)において、打消推量の助動詞のマジイとマイの使用について、巻別の使用状況に偏りがみられることを指摘し、その意味するところについて考えてみたことがある。

- (13) 文中カ・文末ゾ以外の形式による内容的疑問文の「反語」(一一二例)のうち、まとまった用例数をもつ形式は(〜カ)。(七例)である。特に、巻別に偏った使用状況は示さないが、表現性の点で、特徴が見られる。

・(義経↓与一)後代の冥加ぢやと喜ばぬさぶらひは何の用に立たうか」と仰せられたれば(三三六一三・卷四一七)(↓何ノ用ニ立ヘキカ 六四八七・卷十一)

この形式の「反語」は、いずれも相手が当然持っているであろう認識を再確認する場合に用いている。例でいうと、「侍は(このような)大役を仰せつかれば光栄に思ふべきだ」という心得を、問いかけての形で確認する。疑問詞は不確定要素を表す表現(「何か」としての機能に近く、その意味で肯定的疑問文の性格をも持つものである)といえる。肯定的疑問文は文末カで表すことが一般的であった

ため、この種の「反語」では文末カの形式を用いているとも考えられる。

- (14) 卷別の使用傾向の解釈の方法について、必ずしも先学によつて統一の見解が示されているわけではない。しかし、矢島(一九九三)において、種々の考え方や立場に従つて、打消推量の助動詞を用いて検証した結果、清瀬(一九六八)による考え方が、言語使用の偏りを捉えるのに最も有効であるとの見解を得ている。本稿で扱う疑問表現についても、他の立場による区分にしたがつて検証してみたが、やはりこの二分式の考え方が捉えやすいようである。

- (15) ちなみに、地の文の例の卷別の使用数は、巻の前半対後半では〈Nカ〉。|| 一対三、〈Nゾ〉。|| 四対〇、〈Nカゾ〉。|| 二対二であり、やはり、同様の傾向を示す。

- (16) 例⑥では、疑問詞イカデが用いられている。この疑問詞は力を直接続ける形で一体化して用いることが多い(天草版平家でのイカデ全一三例中一二例でイカデカの形)。古典平家でイカデカが対応する例では、天草版平家では他にナゼを用いることがあるが、特に、改まりの意識のないところでは、こちらの形式を用いている。

・(清盛↓仏) 見参するほどではなぜに声を見聞かいであらうぞ? (九六二・卷二一) (↓いかでか声をもきかであるべき  
九七四・卷一)

改まりの意識が必要な部分では、文中カを構成するイカデカ、そうでない部分では、文末ゾを構成するナゼを用いるというように、係助詞の使用は疑問詞の使用とも関わっている部分がある。

- (17) 肯否的疑問文の「反語」で、文末カを取らない形式には、文末ゾと文中ヤがある。このうち、文末にゾを取るものは、感動詞的に用

いている「なに」を疑問詞と誤つて、それに呼応するものとして混入した可能性がある(一例)。

・(木曾↓牛飼い) なにどこも車であれば角水をつけて下る、にむつかしいことがあらうぞ(二〇八二・卷三二) (↓正確二対応セズ)

文中ヤを取るものは、説法などの特殊場面、あるいは上位者を聞き手とする改まった状況等で限定的に使用されている(四例)。

・(上人↓大臣殿) このち七八十を過ぎさせらる、とも、思へばほどやござらう? (三六四二・卷四二) (↓思へハ程ヤ候へキ 七一五九・卷十二)

例のように文中ヤは、古典平家では四例とも「候」を伴つた敬意を含む表現が対応している。ちなみに天草版平家で文末カの二三例中で、古典平家で「候」が対応するものはわずか三例に過ぎない。この点からも、文中ヤが特殊場面で限定的に使用されていることが理解されよう。

- (18) 天草版平家の肯否的疑問文による「反語」に対応する古典平家の文中ヤの例の一三例中一例が「ヤウヤアル」である。残り二例は、文語調が明瞭な箇所での特殊な使用例である。

- (19) (1)と類似した形式を取るものに、「(康頼) もし故郷の方へゆられゆくこともあらうか(六六四・卷一九)」と形式名詞をモで受ける「疑い」の例がある(四例)。また、(2)の形式には、「(宗盛↓客人) 仲綱めがことか? (一一七一・卷二三)」のような「問い」の例がある(二例)が、形式名詞が連体修飾を取っており、質的に異なる。

- (20) 内容的疑問文による「反語」で述語に形式名詞を用いる形式のも



のは、次の一例だけであり、天草版平家では極めて少ない。

- ・〔長兵衛↓出羽判官〕下部参つてさがし奉れとは己らが分て何として申さうことぞ(二一一・五・卷二二)〔↓ナヅラ争カ申スヘキ 二五二・六・卷四〕

### (参考文献)

磯部佳宏(一九九二)『平家物語』の要説明疑問表現」辻村敏樹教授古

希記念 日本語史の諸問題」(明治書院)

——(一九九三)『平家物語』の要判定疑問表現」『日本文学研究』

第二九号

伊藤 健(一九七八)『天草版『平家物語』本文の均質性——「御」「出」の

読み分け状況——『高知大国文』第九集

阪倉篤義(一九九三)『疑問表現の変遷』『日本語表現の流れ』(岩波書店)

清瀬良一(一九六八)『天草版平家物語における口訳語の存立状態』『国語学』第七十四集

——(一九七三)『副詞からみた天草版平家物語本文の特色』『国文学

攷』第六十一集

——(一九七八)『天草版平家物語本文の文意理解上の問題点とその

発生誘因』『国語学国文学論攷』(溪水社)

——(一九八二)『天草版平家物語の基礎的研究』(溪水社)

小池清治(一九七三)『天草本平家物語における教本的換言法について

——清瀬説への疑問——』『フェリス女学院大学紀要』第八集

——(一九七六)『キリシタン版天草本『平家物語』の用語に関する

一問題——口訳者は複数か——』『佐伯梅友博士喜寿記念国語学

### 論集(表現社)

菅原範夫(一九八九)『キリシタン版ローマ字資料の表記と読み——ローマ

字翻字者との関係から——』『国語学』第百五十六集

長瀬富子(一九六七)『室町時代の疑問表現——助詞を中心として——』『国

文学言語と文芸』第九卷五号

柳田征司(一九八五)『室町時代の国語』(東京堂出版)

山口堯二(一九九〇)『日本語疑問表現通史』(明治書院)

矢島正浩(一九九三)『天草版平家物語における打消推量・打消意志の助

動詞——資料性との関わりを中心として——』『愛知教育大学研

究報告』第四十二輯